



特集
村民みんなでつくる
オンライン成人式

オンラインの
成人式で、
新成人が将来
語り合える
思い出を。

〈PEOPLE〉 高森 純豊さん / 2020年度大郷青年会会長・成人式実行委員会委員長

あの子、今 今 どうしてる？

飛驒日日新聞編集部が白川村出身者の“今”を追う企画「あの子、今どうしてる?」。村で生まれ育った子どもたちが今、学業や仕事、スポーツなど、それぞれに見つけた道を歩んで活躍する姿をお届けします。



なかもり かのん
中森 華音さん
金沢学院大学1年

小学校3年生から柔道を始め、高校進学とともに金沢市へ。現在も柔道部に所属し、柔道一筋の日々を送っている。

白川村から金沢市に移住して感じたことは?

【村の人って本当にやさしい!】

村の外に出て白川村の人たちの温かさが気がつきました。金沢に引っ越して来たときは初めての一人暮らしが寂しくて、ホームシックになりました。でも、今はもうすっかり慣れて、金沢での生活も気に入っています。練習がほとんど毎日あるので、あまり帰省はできませんが、家族が金沢まで会いに来てくれることもあります!

柔道を始めたきっかけは?

【小学校3年生のときに、先輩のお母さんに誘われて。】

最初は気軽な気持ちで始めましたが、試合で一本勝ちをしたときの喜びがとても快感で。柔道に専念できる金沢学院高校を選び、今までずっと柔道一筋でやってきています。全国各地から柔道の強いメンバーが集まってきたので、とても刺激になります。

今後の目標、将来の夢を教えてください。

【警察官を目指しています。】

柔道では毎年9月に開催されているインカレ(全国大会)で入賞することが最大の目標です。そして、将来の夢は警察官になること。柔道で培ったことを少しでも活かしたいと考えているからです。まずは大学の授業の単位を落とさないように学業もしっかりと取り組みたいです!

料理自慢の村民の「食卓、へおじゃまします!」

ここがこだわり!
石臼で豆をすりつぶす時は慌てずゆっくりと。急ぐと粗くなってしまったり舌触りがよくないの。それから私は、少し僅は張るソバ青豆を使います。白豆よりも色も味もよくなるからね。



民宿「白弓荘」を営む新谷とき子さんは自然の恵みを使った料理で宿泊客を喜ばせる。野菜の天ぷら、庭の池で獲るイワナの刺身と塩焼き、じゃがいもの甘辛煮、わらびの白和え、味付けや火加減は長年の経験による塩梅。「ハイカラではないけど手間を欠けた料理が好きなの」。村南部に伝わる「じんだ」は、年に一度、報恩講の法要で親戚が一室に会す際に食べられる料理だ。煮た豆を石臼でゆっくりとすりつぶし、少々塩と砂糖、辛子を加えて煮て、大根を和えれば完成だ。滑らかな舌触り、優しい甘さのなかにほのかに香る辛子、大根の歯応え、ついつい何度も手が伸びる。



新谷とき子さんの
1軒目
じんだと田舎料理
ばあちゃん味の

「飛驒日日新聞」は、岐阜県大野郡白川村の暮らしや文化、村民のストーリーを届けるプロジェクトです。大切にしているのは、白川村の「ありのまま」を伝えること。年間200万人もの観光客が訪れる世界遺産の白川郷だけではなく、白川村に暮らす一人ひとりのありふれた日常やゆかりのある人々に目を向け、大切に守られてきた伝統や文化、コミュニティのつながりなど、この村の魅力をみなさんと一緒に発見し、発信していきます。

もっと詳しくはWEBで!



www.hidanichi.com

飛驒日日新聞

SHIRAKAWAGO-GAKUEN
白川郷学園だより

村がブランド化を目指す「白川郷こしひかり」。村自慢のお米をたくさんの人に届けるために、白川郷学園8年生17名が「村民学」の授業を通して白川郷こしひかりのPRに取り組みました！



お米のスペシャリスト「飛騨高山お宿 もりもと」の森本久雄さん直伝、おいしいお米の炊き方の授業。

お米をといで一合羽釜で炊きます。炊飯器ではなく、羽釜での炊飯に興味津々！



米や水の種類を変えて炊いたお米を食べ比べ、どれが一番好きかな？



高山研修では高山米穀で、白川郷こしひかりの精米から袋詰めの様子を見学。

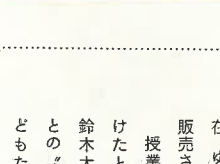


村内の宿の宿泊客にプレゼントする白川郷こしひかりにメッセージを添えて。



白川郷こしひかりは、現在「白川郷学園8年生のイチオシ」としてふるさと納税の返礼品になっています。

【ふるさと納税】のお申し込みはこちら



授業への参画の誘いを受けたとき、当時担任だった鈴木大介先生の「学校は人との違いを学ぶ場所、子どもたちには、多様性を



※村の未来を担う子どもたちが自分たちのふるさとについて学ぶ白川郷学園独自のカリキュラム

SHIRAKAWAMURA NEWS 2020 December
白川村ニュース

白川村の新しい特産が生まれました！
はじめまして、結旨豚です。



今年6月、白川村に新しく養豚場「吉野ジビーファーム白川農場」が村の企業誘致によってオープンしました。最新の設備を取り入れ、安心安全をこだわり抜いて育てられている結旨豚は、さらりとした脂身が特徴のブランド豚。11月半ばには初出荷を迎え、村の新しい特産品として期待を集めています。「結旨豚」を白川村の新しい名物として定着させて、地域貢献ができたらしです。まずは地域の方に食べていただ



吉野ジビーファーム代表取締役吉野敏さん(右)と三男で白川農場長の隆さん(中央)、妻の聡子さん(左)。

吉野ジビーファーム 白川農場
岐阜県大野郡白川村大字坂島字下田1129
TEL.05769-6-3311

村とつながる
KEY PERSON



1人目
山本慎一郎さん
山本佐太郎商店

白川郷学園の子どもたちと「ゆいのか」を開発しました！



ゆいのか

「白川村について話そう」とすると、真っ先に子どもたちの顔が思い浮かびますね。懐かしそうに微笑むのは、老舗油問屋「山本佐太郎商店」4代目の山本慎一郎さん。2019年6月から1年間、白川郷学園8年生16名とともに「村民学」の授業を通して新しい土産づくりに挑戦しました。村民に愛されるおやつを目指して開発したのが白川村産米粉を使った焼き菓子「ゆいのか」です。子どもたちが村の現状や課題への理解を深め、プロモーションやマーケティングにまで取り組んだ大プロジェクト。現在、ゆいのかは村内限定で販売されています。

授業への参画の誘いを受けたとき、当時担任だった鈴木大介先生の「学校は人との違いを学ぶ場所、子どもたちには、多様性を

感じて欲しい」という考えに深い共感を覚えたという山本さん。村特有の閉鎖的なイメージに反して、学園の寛容な姿勢は新鮮に感じられたといいます。

「子どもたちは次の春には卒業を迎えます。10年、20年先の白川村でもゆいのかを愛され続け、成長した子どもたちが別のカタチでゆいのかに関わる姿を見てみたいですね」。山本さんはゆいのかと子どもたちの未来に期待を寄せています。

001
特集

**村民みんなで作る
オンライン成人式**

誰も予想しない未曾有の事態が世界を襲った2020年。会いたい人に会うこと、見たい景色を見ること、当たり前だったことがそうでなくなり、白川郷でも一時は観光客が姿を消し、どぶろく祭をはじめ、数々の地域行事が中止を余儀なくされました。そんな中、白川村の歴史と村民の心に深く刻まれたことがあります。半年が経った今も、思い返せばみな顔をほころばせる、「村民みんなで作るオンライン成人式」です。



◎コロナ禍の成人式。集まれなくても、開催を。

豪雪地帯の白川村では毎年、お盆の時期に成人式が行われます。成人式の企画運営を担うのは、村の青年会の有志で結成される成人式実行委員会です。今年も15名ほどが参加。その実行委員会委員長として成人式を指揮したのは高森純豊さんです。高森さんは白川村で生まれ育ち、自らも8年前に村内にある合掌造り民家園で成人式を迎えました。

今年、実行委員会と開催可否の決定権を持つ村役場で、成人式の話があがったのは5月のこと。当時、新型コロナウイルスが全国的に蔓延し、村からは世界遺産白川郷を原則閉鎖とする緊急メッセージが発令中でした。新成人のほとんどが村外での生活を送っている状況を踏まえ、村は「新成人が帰省するかたちの成人式は自粛すべき」と判断。しかし、高森さん率いる実行委員会のメンバーの頭に「中止」の文字はなかったといいます。会えなくても、集まれなくても、新成人はもちろん、村民にも喜んでもらえる成人式を企画したい。会議を重ねて生まれたアイディアがオンラインでの村民参加成人式です。

◎成人式で村が結束。みんながコロナを乗り越える。

「オンラインで動画をただ配信するだけでは特別なものにはならないと思いました。ただでさえコロナ禍で村が落ち込んでいるなか、村民みんながこの状況を乗り越える企画にしたかったんです」と、高森さんは振り返ります。お祝い動画の撮影や、新成人へのプレゼント企画など、村民が参加できる企画には、式をつくりあげる村民自身も笑顔になってほしいという実行委員会の思いが込められています。

オンラインに慣れないご年配の方にはオンライン開催を受け入れてもらえないのではないかと不安を抱きながらも、村内放送や折り込みチラシの配布で周知。準備の段階から想像以上にたくさんの方々が集まったことには実行委員会も驚きを隠せませんでした。成人式当日、29名の新成人はテレビ電話を通して全国各地から式に参加。村内3カ所に設置された会場とも中継をつなぎ、村民からの温かい祝福が送られました。

◎将来、新成人が再会したときに、笑って話せる時間を叶えたかった。

成人式終了後、実行委員会のもとには新成人からも村民からも様々なかたちで感謝の



高森 純豊 たかもりあやと
1992年、白川村生まれ。高校卒業後は2年間古川で過ごし、2012年帰村。2020年度大野郡青年会会長及び成人式実行委員会委員長を務める。

言葉が届きました。開催前はオンラインに否定的だった方からも絶賛の声が届き、高森さんは改めてオンラインで開催したことの意義を感じたといいます。

「もし、成人式がなくなってしまうたら、今年の新成人は将来再会したときに共通の話題をひとつ失ってしまうと思ったんです。新成人のみならず、語り合える思い出をつくることが、僕としてはとても嬉しいです。高森さん自身も同級生と再会したときに、成人式の思い出が話題にあがることがよくあるそう。時が経っても色あせることのない時間が、新成人の門出を祝う何よりも贈りものだったのかもしれないですね。来年、成人式実行委員会委員長のバトンは次の世代へ。「オンラインかどうかに関わらず、今年以上の成人式を見ることができたら嬉しいですね」。コロナ禍での開催も成功を収めた白川村の成人式は着実に未来へと繋がっていきます。